海外・貿易

商社の窓

「海鳴りやまず」に学ぶ
旧鈴木商店の忠誠心

いま日商岩井でビデオによる観劇会が開かれている。同社の前身である旧鈴木商店の大番頭、金子直吉を主人公とした花登筐氏の脚本による舞台「海鳴りやまず」のVTRだ。四月の大阪公演を見た植田三男社長の「芝居としてもおもしろいが、社員教育に最適」との指示で時ならぬ社内観劇会となった次第。

鈴木商店といえば、わが国貿易商社のルーツ。上役も下役も同じ食事という家族主義の社風のもと、権限はどんどん若手に委譲し、中心に社員が一致団結して次々と新規事業に立ち向かうくだりが感動的」で、とりわけ困難に直面した植田社長によれば「金子直吉を立てて人材を養成していった。社員のオーナーや店への忠誠心は厚く、事業を通じて国の発展に尽くす使命感も強かったと伝えられる。

この「海鳴りやまず」と、社長と社員の対話集会で社内の活力を取り戻す作戦。香港法人の為替先物投機の失敗が表面化して以降、「落ち込んだ社員の士気を何とか引き上げたい」というのが動機で、現在、各本部ごとにまず部長クラスとの対話が進められている。植田社長は「多くの社員と話してみてやはり厳しい事態には変わりはない」と毅然たる姿勢。特に同社にとっては航空機疑惑が一段落、全社的に出直しを誓った矢先の事件だけに、まじめな社員のショックは相当なもので「この時の社員の会社への忠誠心には厚いものがあるとの指摘も強かった」と伝えられる。

の時代にどう対処したらいいか教えられるところが多かった」に違いない。

しかし、今回の為替投機失敗に限らず、同社は事件を起こすたびに「個人の独断行為で、モラルの問題」として処理してきた。権限を委譲した結果、独断に走り事故を起こしても家族主義によって責任の所在があいまいにされてきたきらいがある。もとよりこの芝居で忠誠心が湧き出てくるとは考えていないだろうが、社員にとってはビデオを見るかどうかで忠誠心のいくらかは試されることになりそうだ。

（小林隆記者）

（五六・七・七・日経産業新聞）

ロビー

〝海鳴り〟精神説きハッパ

日商岩井社長　植田三男氏

「為替投機は社としても固く禁じていた。それを現地責任者が無断でやってしまった。残念でならない」と顔をしかめるのは香港事件でミソをつけた日商岩井の植田三男社長。株主総会は無事終了したものの、とにかく損失が百六十億円にものぼるとあって「これを回復するには、いまの経常利益ベースだと二、三年はかかる。今後、心を引き締めてやるつもりだが、やはり厳しい事態には変わりはない」と毅然たる姿勢。特に同社にとっては航空機疑惑が一段落、全社的に出直しを誓った矢先の事件だけに、まじめな社員のショックは相当なもので「この時の社員の会社への忠誠心には厚いものがあるとの指摘も強かった」と伝えられる。

ミソをつけた日商岩井の植田三男社長。株主総会は無事終了したものの、とにかく損失が百六十億円にものぼるとあって「これを回復するには、いまの経常利益ベースだと二、三年はかかる。今後、心を引き締めてやるつもりだが、やはり厳しい事態には変わりはない」と毅然たる姿勢。特に同社にとっては航空機疑惑が一段落、全社的に出直しを誓った矢先の事件だけに、まじめな社員のショックは相当なもので「この時の社員の会社への忠誠心には厚いものがあるとの指摘も強かった」と伝えられる。

顔を出し話し合っていく」と決意を表明。相次ぐ不祥事は〝社の体質では〟との批判にも、殿近、舞台化された〝海鳴りやまず〟を持ち出し「ウチは当時の先輩があれだけの事業をやってのけた鈴木商店の流れをくむ会社。胸を張ってよい伝統があるのだ」と強調。舞台のビデオをわざわざ社員に見せながら「あの団結、忠誠心、活力を忘れるな」と、意気消沈気味の社内に盛んにハッパをかけている。

（五六・七・四・神戸新聞）

謹啓　初秋の候を迎えますます御清栄のこととお喜び申しあげます。

ポートピア81兵庫縣館の出展運営につきましては、格別の御協力を賜り、お蔭をもちまして大盛況のうちに幕を閉じることができました。

ふりかえってみますと二年数カ月の準備期間を経て、去る三月十五日に開館の運びとなりました兵庫縣館ですが、県民各層の御支援をいただき無事百八十日の日程を終え、入館者も県人口を上回る五五二万人に達することができました。

これもひとえに皆様の並々ならぬ御熱意、御尽力の賜物と衷心から感謝申しあげます。

このパビリオン出展の成功が新しいふるさとづくりを推進していくうえで、私達の大きな心の絆となり希望に満ちた輝く未来社会の建設につながることを願ってやみません。

今後とも県政に対する皆様の温かい御指導、御支援を賜りますようお願い申しあげます。

まずは簡単ですが書中をもってお礼申しあげます。

敬具

昭和五十六年九月二十二日

太陽鉱工㈱
柳田義一殿

兵庫県知事　坂井時忠

余録

「鈴木」という姓のルーツは和歌山・熊野辺という説があるが、そこに目をつけた和歌山県観光連盟が赤字国鉄とタイアップして、十一月から鈴木姓の客の誘致作戦を始める。「鈴木さん」ばかり乗せた「鈴木号」を紀勢線に走らせる「鈴木ツアー」、二日以上宿泊の「鈴木さん」には特別プレゼントを贈るなど▲日本の姓氏は五万とも十万ともいい、世界最多らしい。お隣の韓国のざっと四百などに比べるとケタちがいだが、そのトップとみられるのが鈴木さん。全国で二百万世帯。平安時代熊野信仰が広まるにつれ、熊野豪族の一派「鈴木氏」の名が全国に行き渡ったとされる▲名前にも栄枯盛衰があり、そのルーツもさまざまだ。平安初期の「新撰姓氏録」にはすでに千を超える氏が見えるが、物部、大伴などは天下った神々の末というから古い話▲古代豪族衰退のあと、「源平藤橘」が中央政界でハバをきかす。いまも数多い「藤原」は、大化改新の功労者中臣鎌足が危篤のとき、天皇が功をめでて鎌足の邸宅の地名、大和・藤原を贈ったのが起こりとされる。権力者にあやかりたいのも人情で、氏の明確ならざる家までがこの「四大姓」を名乗るようにもなる▲江戸時代、苗字を許されなかった町人なども、明治初めの改革で姓をつける。頼みこまれた物知りが、いいチエもなくなり、青柳、喜撰、鷹爪、宇治と銘茶の名をつけたがなお足りず、酒井、榊原、井伊、本多と徳川四天王の名でお茶を濁したという話も（明治事物起原）▲先日、国鉄水戸駅長の「鈴木さん」が鈴木仲間二百人と和歌山をたずねて気勢をあげた。善率首相からも祝電が。国鉄の赤字解消に総理「鈴木」も一役買ったお話。

何がもの云う
学歴か努力か

柳田　義一

福沢諭吉翁は嘗て金無き者は学問するに及ばずと云い切った。私財の無き者学歴を求めるの余り苦学の為身体を害ねたりして一人の人間を失うことを戒められたまでで決して貧困者を軽べつしていると誤解してはならない。

之は無理をして迄学校を出る暇に実務を養えよとの一理も勇気ある発言であった。その言葉通り学歴なしに名を世に残した人物も珍くない。之は現代の学歴信仰に対する痛烈なる警語とも云えよう。最近某大学に起きた不正入学事件の如きは学歴利益を求める痴態以外の何ものでもない。企業界の管理職者たるもの努力性の有無を徴すべきであろう。学歴があってもやる気がなかったら猫に小判に過ぎないし、時として学力が気違いに刃ものになりかねない。天才とは優れた才能のもち主を云うのではない。努力する性質を豊かにもつ人間の事であるとの小泉信三先生の言葉は至言で尊いものがある。作家の吉川英治氏は友人扇谷正造氏に「僕の履歴書はたった二行だよ。小学校中退、賞罰なし」とさすがの扇谷氏も胸のつまる思いがしたと云う。吉川氏は嘗て「路傍の石」と「他山の石」の相違が判らず人から哄われた為に百科辞典を五十回余り繰り返したと云うエピソードをのこされた。吉川氏の努力心を開発させたのは愛情と厳しさを持った母堂であった。現代の教育ママの近視的愛情に対して考えさせられる。つまり青年の持つ創造、努力、情熱の三特性を正しく開発するのが家庭の肉親愛の要素と云える。又社会なら管理者達の才能であろう。

歌人吉井勇氏は愛酒家であっただけに燗のつけ方が矢釜しかった。日頃料亭の燗番にその秘けつを問うた。彼は一級酒は一級酒なりに二級酒は二級酒なりに味を出すのが燗番の腕で、二級酒に一級酒の味を出すのは邪道だと云った。人間は酒ではないから銘柄で資格を決める事は許されまい。「人間は生れではなく行為に依って価値づけられるものと仏陀は之れを戒められている。釈尊の弟子の中で知能指数の低い周梨般得が「塵を払い、垢を除けよ」の指導に依り遂に秀才とは別次の開眼を得たと云う喩え話しも成程と感じさされる。

蟻地獄先頭の蟻見えぬまま　義一